

## Z101r 流星・彗星にみる兆しと呪いの天文民俗

中野真備（甲南女子大学）

近年、天文と文化をめぐる研究が国際的にも注目を集めるなか、日本列島における天文文化の民俗学的・人類学的研究は依然として低調であることが指摘されてきた。実際のところ、アイヌや琉球列島の文化を除けば、研究の多くは歴史学や宗教学、文学の領域におけるものが多い。民俗学では、野尻抱影をはじめ北尾浩一らによって、民衆の天文民俗の地道な発掘がなされてきた〔後藤 2014〕。とりわけ天文民俗学における星の和名収集は、各地に残る貴重な伝承を記録し、多分野に影響を与えたといえるだろう〔北尾 2018〕。これらの蓄積をふまえて、発表者はこれまで生業における天体知識の運用と伝承のありかたを、イカ釣り漁師の現地調査と通時的比較から論じてきた〔中野 2021〕。そこでは、星の和名に加え、それらの知識が日々の漁撈においていかに実践的に活かされ、変容しつつ伝承されてきたかに焦点をあてた。本発表では視点を転じ、流星・彗星のような予測不可能な現象に対する文化的対応に着目する。これらの現象をめぐる俗信の記述を手がかりに、その伝承構造について、柳田國男が提示した「兆・応・禁・呪」の枠組みにおける「兆（きざし）」や「呪（まじない）」を参照し、分析を試みる。本発表では、人びとが予測不可能な現象をいかに感受し、ときにそれを転じさせたのかを論じることで、天文文化研究に民衆的实践に根ざした新たな視角を提示したい。

北尾浩一 2018 『日本の星名事典』 原書房

後藤明 2014 「天文と人類学」『文化人類学』 97 (2) : 164-178

中野真備 2021 「佐渡のイカ釣り漁撈における天文民俗」『國學院雑誌』 122 (7) : 23-41